

〔特別レポート〕

熱狂したワルシャワの30日間

～第15回ショパン国際ピアノコンクール、日本人の健闘光る



ワルシャワで5年に一度開かれる、ショパン国際ピアノコンクール。アシュケナージ、アルゲリッチ、ツィメルマン、ダントイ・ソン、ユンディ等を輩出、ショパンの覇者がピアノの世界をリードしてきた、といっても過言ではない。日本人入賞者も中村紘子、内田光子、横山幸雄、小山実稚恵等、錚々たるピアニストが名を連ねている。

第15回目となる今回、9月23日より約1ヶ月間ショパン国際ピアノコンクールが開催された。今年は予備予選からワルシャワで行われ、実に257名ものピアニストがエントリー。日本人出場者も約80名と過去最多となった。

第一次予選進出者は80名に絞り込まれ、9日間にわたる競演が繰り広げられた。エチュード、ワルツ、ノクターン、スケルツォ、プレリュード、バラード、アンプロンプチュ等より、

各自約50分のプログラム。小品の組み合わせの中で、独特のセンスを見せるもの、的確な解釈の演奏、ミスはあるが才能溢れる演奏など、それぞれのショパン像を見せていく。どのような審査結果になるか、参加者や聴衆が固唾を飲んで見守る中、一次予選通過者32名（うち日本人10名）が告げられた。二次予選では、より構成的力を求められるマズルカ、ソナタ、ポロネーズ等の大曲を演奏。多くの難曲を不足なく仕上げる難しさ、そして様々な感情や境遇、宿命と葛藤しながら作品に昇華させていったショパンを、多角的に捉えて演奏に反映する難しさ。それはあたかも、ショパンからの優雅な挑戦状のようである。

そして本選には12名が進出。うち日本人は5名、過去最多の日本人ファイナリストが誕生した。ピティナ出身者は



4名(関本昌平、大崎結真、根津理恵子、工藤レイチェル 奈帆美)と、大健闘。本選ではワルシャワ国立フィルハーモニー交響楽団と共演、超満員の聴衆の中で弾いた心地はどうであったろうか。この歴史あるショパンコンクール本選のステージにたったピアニストとして、結果に関係なく、皆の記憶に刻まれることだろう。

そして10月22日(日)深夜、ついに最終結果発表の時を迎える。「第4位 Shohei Sekimoto!」—2003年度特級グランプリの関本昌平さん(20)は、堂々第4位入賞が決定した。今回の邦人最高位であり、また過去を振り返っても、4位以上の上位入賞は4名しかいない栄光の座である。その演奏に垣間見える堂々とした自己主張と驚異的なテクニクは、十分世界にアピール。ピティナ・グランプリの

歴史に新たな1ページを刻んだ、とも言えるだろう。

ところで、今大会の審査員長アンジェイ・ヤシンスキ教授は、「ショパンらしい演奏家を輩出したい」と語っていたそうだ。結局、優勝は地元ポーランドのラファウ・ブレハッチが手にしたが、その素朴ながら崇高な音楽は、まさにショパンの再来のようでもあった。

写真左上より)

- ①ワルシャワ郊外ジェバ・ゾラ・ヴォラにあるショパンの生家。全てはここから始まった。
- ②ワジェンキ公園にあるショパン像。今日も静かにワルシャワを見守る。
- ③善良で素朴な、しかし不屈の国ポーランド。華やかなパリにいても、ショパンの心は故国ポーランドにあったのかもしれない。遺言によりショパンの心臓は、ワルシャワ市内の聖十字架教会に安置された。
- ④優勝したポーランド期待の星、ラファウ・ブレハッチさん。月桂樹を手に喜びをかみ締めて。
- ⑤二次予選に進出した辻井伸行さん。目の不自由なことを忘れさせる名演を聴かせてくれた。
- ⑥同じく二次予選に進んだ大嶺未來さん。現在ポーランド留学中で地元でも人気。
- ⑦ショパンコンクール審査員一同。表彰式にて。
- ⑧公式プログラム。期間中は、過去入賞者のCDやグッズ等も販売していた。

ショパン国際ピアノコンクールを聴いて

レポート:山田千代子先生
(当協会正会員)



自分なりの観点を保って、全演奏を聴く

一次予選出場者80名の全演奏を最後までじっくり聴かせて頂きたくて、今回は一次から本選まで同じ席の通し券を確保しました。私達の席は幸運にも2階のバルコニー席で、20名の審査員席の斜め横の、音響のとてもよい場所でした。

一次予選は1人50分間休憩なしの為、大変な集中力と持続力が必要とされ、演奏者のストレスは計り知れません。その張り詰めた空気の中で9日間にわたり、1日9名の演奏が午前10時から午後10時まで続きました。

「自分はこの観点から聴く」というしっかりした基準を定めておかないと解らなくなるほど、さすが世界から選ばれた80人の演奏者は多彩でした。日本人は高度な技術で立派に良く弾き込んでいました。中には、音楽が少々かたい感じで何かもう少しあればなあと感じる方もいましたが、準備もよくできており安心して聴けました。ポーランド人のピアノは準備不足なのかソツがあるのですが、どの演奏も温かく優しく柔らかくてほっとし、もっと聴いていたくなりました。若い先生方や学生さん達は「ポーランド人のピアノを聴いていると、やはりここにきて良かったと思います。」と話しかけて下さいました。この温かいピアノは、ポーランドの血、あるいは文化なのでしょう。

13日からの二次予選は、課題曲がマズルカ、ポロネーズ、ソナタになった事と、一次予選でその演奏者の輪郭が分かっているので、聴くのが少し楽になりました。

ショパン縁の場所を訪ねて…そして今ショパンコンクールを聞ける幸せを思う

空き時間にはショパン縁の場所を訪ね歩きました。まずショパンの心臓が柱の下に埋められている聖十字架教会へ。ワルシャワの95%がローマ・カトリック信者との事、どの教会も重厚で厳粛さの中で静かに礼拝する人々が印象的でした。またショパン像のあるワジェンギ公園、ショパン博物

館…、ワルシャワアカデミーでは学生食堂でランチを、大きなグランドピアノがステージにある喫茶室でコーヒーを頂きました。12日の休日に赴いたショパンの家では、ショパンがとて身近に感じられ、それは今回優勝したブレハッチさんの演奏の中に感じるのと同じ香りでした。

そして17日にはクラコフ経由でアウシュビッツ強制収容所まで足を運びました。あまりの残酷さに声も出ませんでした。ユダヤ系と思われる母と娘が抱き合っ、顔中涙で身体を震わせて泣いている姿も目にしました。ビルケナウ収容所改めてあまりの悲惨さに愕然とし、今平和にショパンコンクールに来ていることが申し訳なく、胸が痛くなりました。

18日から始まった本選のコンチェルトはさすがに素晴らしく、深夜1時半の審査発表時は興奮の渦と化していました。そして、表彰式とガラコンサートも感激の連続でした。

4位入賞の関本昌平さん、山本貴志さん、入選の大崎結真さん、根津理恵子さん、皆さんおめでとうございます。皆さんに1位をとるほど、素晴らしい演奏でした。これまで支えてこられた先生方やご家族の愛情とご苦労を思い、頭が下がります。(2次予選の辻井伸行さんの演奏に、何故か涙がとめどなく流れました。)

これからの指導に生かしたいこと

まず人を育てること。いかなる時にも冷静に、平常心を保てるしなやかな強さ、優しさ、思いやりの心、品性を保ち、自己管理ができる人を育てる大切さを実感しました。演奏にはその人の心が出ますから。

そして耳を育てること。音を良く聴ける、そして聴こうとする耳。良い音楽を聴く機会を沢山持たせたいですね。

3つ目は無駄な動きをセーブして必要な動きを選び取る指、手首、腕を作り、脱力の大切さを教えることです。

ワルシャワアカデミーのカバラ教授のお言葉「ショパンの演奏は、気高く高潔な気持ちで弾く。腕、身体、手首を柔らかく、呼吸するように弾く。ポロネーズは気品と威厳を持って…」その言葉を胸に刻んで、24日帰国の途につきました。